

レイリア訪問

について



レイリア訪問

レイリアは音楽創造都市である。ユネスコによるこの認定は、1142年にポルトガル初代国王アフォンソ・エンリケスによって創設されたこの街の文化、建築、景観遺産を発見するためのモットーとして、音楽がある活気ある街の革新的な精神を反映している。

リス川が流れるこの街の発見は、ロドリゲス・ロボ広場から始まる。多くのテラスとポルトガルの舗道があるこの広場の名前は、1580

年にレイリアで生まれた詩人・作家を称えている。この広場は、レイリア市民と観光客の出会いの場であり、年間を通して様々な文化・スポーツ活動の舞台となっている。1875

年に出版され、ポルトガル・リアリズムの最初の文学作品とされるエサ・デ・ケイロスの小説『アマロ神父の犯罪』には、この広場や、筋書きの着想源となった街の他の場所が何度も登場する。

街の中心部からすぐに、建築家ゴンサロ・バーンの作品である**音楽創造都市の家**（Casa da Cidade Criativa da Música）に到着する。鏡張りの建物は、ファサードの一面にレイリア城（Castelo de Leiria

）を映し出し、より堂々とした雰囲気を醸し出している。創造性、文化、持続可能な発展というレイリア市の使命を体現する、アーティスト・レジデンスを含む文化プロジェクトの開発と推進に特化したスペースである。

レイリアのアイデンティティとイメージの中で避けては通れない位置にある**城に登って**

みる価値はある。象徴的なアーケードからは、

息をのむような街の眺めが楽しめる。^h堂々たる城壁の内側には、19

世紀末にスイス人建築家エルネスト・コロディによって行われた改修工事を含む、様々な時代の占領と建設の痕跡が無数に残されている。ポルトガル銀行の支店があった現在の**芸術銀行**（Banco das Artes）や、**サンタアナ文化センター・マーケット**（Centro Cultural Mercado de Sant'Ana）など、レイリアの街で見かける数多くの建物を手がけた。

城へと続く広場、**中世の聖ペドロ教会**（Igreja medieval de S.

Pedro）の近くに、モダンな建物が目を引く。mjlmo-映像博物館（Museu da Imagem em Movimento）で、映画と写真に特化したスペースで、一見の価値がある。



街の中心部に戻り、歴史的な中心部の狭い通りを散策する。バラオン・デ・ヴィアモンテ通り（Rua Barão de Viamonte）、通称ディレイタ通り（Rua Direita）は、ラルゴ・ダ・セ（Largo da Sé）とテレイロ広場（Praça do Terreiro）を結んでいる。地元の商店、レストラン、手工芸品などが並ぶメインストリートのひとつで、文学、都市アート、大道芸などの文化的なルートが交差する場所でもある。

レイリア大聖堂（Catedral de Leiria）

は1550年に建てられた教会で、鐘楼が本堂から奥まっているのが特徴だ。1755年の地震で教会は大きな被害を受け、バロック様式の新しい塔を城壁の古い門のひとつ、太陽の門（Porta do Sol）または南門の隣に建てなければならなかった。また広場には、19th世紀のロマン主義時代に建てられた、タイル張りのパネルがいくつもあつた古い建物がある。この建物ではパイヴァ家の薬局が営業しており、タイル張りのファサードはレイリアでは数少ないこの時代の例で、興味深い広告の特徴となっている。

黒猫広場（Largo do Gato Preto）としても知られるラルゴ・パイオ・グテーレス（Largo Paio Guterres）（舗道を見ると、その名前の由来がすぐにわかる）では、**画家の家（Casa dos Pintores）**が一見の価値がある。この小さな建物は、現在**レイリア異文化対話センター（Centro de Diálogo Intercultural de Leiria）**が入っているが、歴史的建築物の重要な一部であり、中世の都市配置の一例であり、レイリア歴史地区で最も古いタイプの住居である。ファサードを描いた画家が多いことから、このように呼ばれている。

街の歴史的な中心部にありながら、現在はアフォンソ・デ・アルブケルケ通り（Rua Afonso de Albuquerque）に、建築家コロロディ（Ernesto Korrodi）による新たな建築要素がルートを彩っている。これは**アーチハウス（Casa do Arco）**で、かつて病院とカサ・ダ・ミゼリコルディア（Casa da Misericórdia）が建っていた場所だ。

しかし、市内には見どころがたくさんある。リス川のほとりを、歩行者専用道路である**ポリス小道（Percurso Polis）**に沿って散策するのは、川辺の風景や途中のさまざまな橋に思いを馳せながら落ち着いて歩くにも、一年中いつでもスポーツの練習ができる空間を楽しみたい人にも、誰にでも利用しやすいオプションだ。

リス川左岸の隣には、**聖アウグスティヌス教会と聖アウグスティヌス修道院（Igreja e o Convento de Santo Agostinho）**がある。現在**レイリア博物館（Museu de Leiria）**があるこの2

この建物は、全体が公益文化財に指定されている。

教会の主礼拝堂の祭壇画は、20th

世紀初頭に建築家エルネスト・コロディによって設計された。レイリア博物館の収蔵品には、市のコレクションや考古学的保護区が含まれ、長い間人が住んでいた地域の経験の証人となっている。博物館はしばしばコンサートの会場となり、開館以来、国内外で数々の賞を受賞している。

もう少し行くと、川の左岸に製紙工場がある。その歴史は1411

年まで遡り、おそらくイベリア半島で最初に登場した製紙工場のひとつだろう。建物は建築家シザ・ヴィエイラのアトリエによって修復された。



観光の途中、あるいは最後に、卵黄、砂糖、アーモ

ンドでできた小さなケーキ、**プリサ・ド・リス**をお楽しみください。丘の頂上には、16世紀に建てられ、18世紀に建てられたバロック様式の階段（162段）がある、**受肉の聖母の聖域**（Santuário de Nossa Senhora da Encarnação）があります。受肉の聖母はレイリアの守護聖人であり、毎年8月15日が聖母の祝日である。